



## 市民は米軍の機械力に目を見張った

佐世保空襲から約3カ月後、市街にはまだ空襲の残骸が未整理のまま至る所に残っていた。

米軍は進駐と同時に、トラクターを出動させ、まず天満町付近の焼け跡の整理に取り掛かり、ブルドーザーなどを使って見る見るうちに数町の残骸をきれいにしてしまった。市民は今さら

のように米軍の機械力の素晴らしさに目を見張り、日米両国の力の差を認めずにはいられなかった。

兵士たちはやがて市中に外出し始めた。彼らの顔には敵意が見られず、それどころかチョコレートやキャラメル、ガムなどの菓子を配ったり、たばこを与えたりして、急激に市民との間を近

づけていった。

兵士たちの多くは日本の物を珍しがり、赤い着物や日の丸の旗、下駄などを欲しがった。市では、進駐軍将兵の記念品ともなり、土産品ともなるこれらの品の即売場を開くことになり、町内会を通じて広く市民に出品を呼び掛けた。



空襲を受けた夜店通りの残骸を片付ける占領軍のブルドーザー。現在の下京町付近。写真提供／芸文堂